
透析専門介護・医療施設における腰痛対策チームの構築

社会福祉法人照善会 こくら庵

医療法人衆和会 長崎腎病院

○福本 駿 小森優也 東村清貴 小島千佳子 小松利恵子 林 涼子 上谷しのぶ 船越 哲

【目的】

一般企業では腰痛の有病率は年々下降しているが、介護・看護労働者では増加している。今回は昨年より当院で取り組んでいる腰痛対策活動を報告する。

【対象】

当法人の介護職 21 名、看護職・ME154 名に記名式のアンケートを行い、結果を元に腰痛対策チームを多職種から構成した。

【結果】

当施設の腰痛保有率は介護職で 71.4%、看護職・ME で 75.0%と、一般病院の平均 65%を上回る状況であった。痛みを自覚する要因では「不自然な姿勢」が 54%と、「力仕事」の 44%を上回っており、福祉機器や補助器具などのハードウェアだけではなく、教育や院内の環境こそ重要なポイントと考える。しかし、例えば「ノーリフティング」の考えもスタッフの受入れは遅く、環境整備のための課題は多い。

【考案】

患者の安全を守りながら透析スタッフの安全配慮義務を遵守することは重要事項であり、施設全体で取り組む中長期の計画が必要と考える。